

故人復活アバターの受容動機となる死生観の発話分析

○相澤巧人 (Takuto Aizawa) (慶應義塾大学 SFC 研究所)、

畠山記美江 (Kimie Hatakeyama) (慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科)

新保史生 (Fumio Shimpo) (慶應義塾大学 総合政策学部)

Keywords : アバター、故人復活、故人情報、AI 倫理、自己情報コントロール

1 目的

本研究の目的は日本科学未来館で実施したアバター体験ワークショップの発話を分析することにより、故人復活アバター (Re-Incarnation Avatars) の体験が参加者に及ぼす影響を明らかにすることである。前回大会の報告では参加者アンケート分析から、故人復活アバターの受容性を決定づける要因要素について、①「技術の体験及び議論におけるリスクの認知と評価の程度」、②「①による技術の受容意向の下げ幅」、③「『自己情報コントロールの重要性』と『周囲の人間との関係性保持への意欲』から使用方法につけた留保と有用性への評価の比較衡量」の3点を示した。特に3点目の「使用方法につけた留保と有用性への評価」の多くを占める「葬送の用法」について、アンケート分析のみでは課題が残されており、特に発話でしか登場しなかった死生観の変化に関する分析は不十分である。故人 SNS の活用法を調査した先行研究[1]によると、VR/AI による故人復活について通常は否定ないし判断を留保する例が目立ったが、急死などの離別の態様により肯定に転じる事例が示されており、技術による死生観・受容態度の変化に関する研究は「継続する絆理論[2]」との関連でも重要度が高い。そのため今回の発話分析は既存のメカニズムを補強することができる。

2 方法

本研究の分析対象はワークショップ参加者による故人復活アバターに関するディスカッションの書き起こしデータである。分析は質的分析ソフト NVivo15 を用い、先行研究で示した構成概念を親子ノードに階層化し、これに書き起こしデータを演繹的にコーディングすることで行った。

3 結果

分析の結果、参加者は葬送目的で故人復活アバター活用への理解を示したほか、アバターと本人の同一性に関する技術的・法的・倫理的な論点にもそれぞれ着目していた。ノード「葬送文化の破壊」に分類した発話「死んでもアバターとして話し合えるから、生きていても死んでも変化しない」や「供養したのにまたこっちの現世に戻すっていうことは複雑」からは、「供養」文化の破壊や死生観の変容について議論していることが読み取れ、死の実感の希薄化や宗教的価値観の喪失の論点に触れたことが、故人アバター受容性における拒否感をもたらした可能性が示唆された。

4 結論

発話データ分析によって死生観の変容や供養文化の破壊といった倫理的・文化的側面への懸念が故人復活アバターに拒否感を生じさせる要因となっていることが明らかとなった。当日の発表ではなぜ葬送が用法限定的に認められるかについての分析も含めて詳細に分析の報告をする。

本研究は、JST ムーンショット型研究開発事業、JPMJMS2215 の支援を受けたものです。

【主要参考文献】

1. 折田明子. 著名人の死後残された SNS にどう向き合うか. 社会情報学会大会研究発表論文集. 2024, p. 165–168.
2. Klass, D., Silverman, P. R., and Nickman, S. L. (1996) Continuing bonds: New understandings of grief. Philadelphia, PA: Taylor & Francis.